

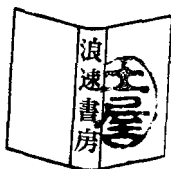
灰物の奮

# 天物の面

土屋隆夫



浪速書房版



天狗の面

---

昭和33年6月30日 発行  
昭和33年7月10日 3版

定価 280円

著者 土屋 隆夫  
発行者 角谷 徳雄  
東京都新宿区四谷左門町2  
印刷者 大柴 亨介  
東京都新宿区市ヶ谷富久町

発行所 東京都新宿区 浪速書房  
四谷左門町2  
電話 (35) 0524 番

---

印刷 享有堂印刷

大場製本

## 序

江戸川乱歩

土屋隆夫君は探偵文壇の最もすぐれた中堅作家の一人である。昭和二十四年、「宝石」誌の百万円懸賞、短篇の部に「罪深き死の構図」を投じて一席に入選したが、同君の処女作であつた。また、昭和二十七年には、同じ「宝石」の新人コンクールに「青い帽子の物語」を投じて第三席に入選した。選考委員の投票の結果は三席となつたが、私自身はこの作に最も惹きつけられ、一席に推したものである。その後土屋君は「宝石」その他の探偵雑誌に多くの作品を発表し、中堅作家としての地位を確保して来たが、長野県在住の地方作家であるため、その実力に比して、進出がおくられていたのではないかと思われる。

私は昨年八月号から、「宝石」の編集に当ることになつたが、土屋君を最も属目すべき作家の一人と考へているので、常連寄稿家として原稿をお願ひし、今まで掲載せられたものは大いに好評を博している。

この書は、その土屋君が情熱をもつて書きおろした長篇推理小説である。片田舎の疑似宗教の教祖ともいふべき中年女性と、その周囲の人々を登場人物とし、そこに起つた連続殺人事件を取り扱つたものだが、田舎の疑似宗教といへば無知の人々を連想するけれども、この物語の犯人は田舎ものらしい知恵者であつて、警察も途方にくれるほどの「不能犯罪」をなしたげたのである。

土屋君はこの小説の中に次のように書いている。

「一言にしていへば、探偵小説とは割り算の文学である。しかも、多くの謎を、名探偵の推理をもつて明快に割りきつた場合、そこにはいささかの余りがあつてもならない。

解平 十 藤田 〓 遺平

その数式に示された解決の部分に、剰余すなわち未解決の部分や疑問が残されてはならないのである」

その意味で、剰余を残すまいとした作家である。個々のトリックに大なる創意はないが、幾つかの小トリックを組み合せて、一つの創意を生み出している。しかし、この作の最大の特徴は「推理」の面白さにある。事件解決の手掛りはことごとく読者の目の前にさらされている。少しも隠しだてをしていない。しかも、それでいて、多くの読者は、作中

探偵の説明をきくまでは、それらの手掛りと真犯人とを結びつけることができないのである。いわゆる「不可能犯罪」に伴う「意外性」が、見事に構成されている。

本格推理小説として決して失望しない作品だということを保証してもよいと思う。

昭和三十三年六月



## 目 次

序 章	天皇の住む村.....	9
第一章	天狗も慾情するか.....	25
第二章	死の狂詩曲.....	42
第三章	土田巡査の憂鬱 .....	59
第四章	見えない手.....	69
第五章	天狗の問答.....	83
第六章	毒殺の論理.....	99
第七章	夜ごとの点景 .....	115
第八章	天狗の鼻について.....	130
第九章	天皇暁に死す .....	138
第十章	特に総理大臣に任ず .....	144
第十一章	誰が風を見たでしょう .....	160
第十二章	北風とアリバイ .....	175
第十三章	蠟燭の消えた時 .....	192
第十四章	面・手帳・煙草の箱 .....	207
第十五章	おりん、空を飛ぶ.....	216
終 章	真相 (潤色多き物語).....	233



装  
幀  
  
土  
井  
  
栄

天狗の面



## 序章 天皇の住む村

会いに来たかよ 牛伏村へ

越した峠は 七曲り

都そだちにや 及ばぬけれど

おぼこ娘も 餅をつく

ホンニヨイヨイ 山そだち

昭和の初期、村の青年団と婦人会が首唱して牛伏音頭をつくり、小学校の校庭で発表会を催した日の、はなやかに感激にみちた光景を記憶している人が、今日、幾人あるだろうか――。

その日、校庭の中央に組立てた舞台の上から、団員達の打鳴らす太鼓の音は、まだ朝靄の立迷つてゐる牛伏村の隅々にまで響き渡つた。

音は、左右の山の側面にぶつかり、それがはねかえつて、重なり合つたまま家々の戸口どころがり

込んでくる。

人々はせき立てられるように、続々と校庭に集つて来た。当時、青年団長だつた池内市助の如きは、抑えきれぬ感情のはけ口を両方の握りこぶしにこめて、誰彼の見さかいなしに肩を叩いて叫んだ。

「見ろや、あの人を。おい、成功だぞ。な、成功じやねえかよ」

そして幾度も便所へ駆け込み、一晚かかつて作り上げた『牛伏音頭発表の御挨拶』をひそかに練習した。

昼近く——なんと人々は、五時間も校庭に立ちつくして太鼓の音に心をそり立てられていたのだが、いよいよ開会を知らせる三連発の花火が、景気よく打上げられるに及んで、人々の興奮は頂点に達した。

青年団長池内市助は、開会の挨拶を述べるべく舞台の上に立つたが、群集の中から湧き上つた拍手に依つて、彼は体がグラグラと前に傾くのを防ぐのに精一杯であつた。一晚がかりの草稿はなんの役にもたらず、彼はただ同じことを幾度も繰り返した。

「我々はその、牛伏村の文化の為に、その、村を愛し……愛する村の文化の為に……全く我々は生命も惜しくはないという決意を持つているのであります……」

善良なる人々は、幾度でも、同じ文句に拍手を惜しまなかつた、彼は満足し、定まらぬ視野の中に

うごめく、黒々とした一団に向つて、泣き出したいような感動を味つたのである。

来賓の挨拶はいずれも同じで、作詞の優秀さを讃え、村長の如きは「県下に誇る最高の芸術的音頭であるという確信」を披瀝した。

つづいて、団員と婦人会員による振付けが披露され、村人達までが、いつかその中に加わつて、踊りの輪が校庭一杯にひろがる頃、牛伏村全体が、濃い夕靄の中に、すつぽりとつつまれていつたのである——。

全く楽しい時代であつた。それは、生活の豊かさを言うのではない。ともかく、人々の心に、安らぎと牧歌的な情緒が残つていたのである。

その証拠には、終戦後、やはり青年団の手によつて発刊された牛伏時報に、次のような投書が掲載されたのを見ても判ると思う。

「牛伏音頭なんて、全くいやな歌だ、青年団はこの歌の廃止について、討論会を開くべきだと思ふ。越した峠は七曲りなぞという文句は、いたずらに我が村の交通不便と非文化性を誇示するだけだ。こんな文句を有難がつているから、牛伏村は近隣の女性から敬遠されて、近頃は嫁に来る者が少いという話だ。おぼこ娘も餅をつく、とは一体なんだ。昔から、餅をつく力は親にも貰つてこない、といわれる程の重労働だ。この村では、おぼこ娘も餅つきをするほど力があるぞと、自慢したのは昔の話

だ。いまだき、腕と足と腰だけ太い、ズングリ型の山ざる娘など、誰が好くものか。第一、おぼこ娘が餅をつくなぞという文句は、考えようによれば、随分エロな話ではないか。女性侮辱も甚だしい。牛伏村の全女性の皆様よ。立上つて牛伏音頭追放に御協力下さい」

果然、牛伏村の青年団は、この投書をめぐつて賛否両論が対立した。

女性側には、圧倒的に廃止の意見が多かつた。

「ホンニヨイヨイ山そだち、なんて言葉は、働きものを嫁に貰え、というような農村の古い考え方の現われだとオラ思うです。オラ達女性だつて、結婚は労働の始まりだなんて思いたくねえです。この歌は第一、民主的な男女平等つう考えが足りねえで、女をバカにしている所が多いから反対です……」

民主的——神のような権威と神秘にみちたこの言葉は、団員達の心に大きな共感を呼んだのである。

「そう言えば、民主的でねえな……」

「戦争前の歌だから、封建的だわさ」

「じゃ、民主的な牛伏音頭をつくることはどうだね」

「いいな。一般から募集してな。千円も賞金を出したらよからず」

このような雰囲気の中で、牛伏音頭追放の意見は、青年団に依つて決議されたのであつた。

すべてが音たてて崩れて行く一瞬の光景であつた。かつて、夕靄のせまる校庭で、踊りの輪に加わつた人達の中で、誰がこのような事態を予想し得たであらうか。

当時の青年団長で、現在村会議員である池内市助は、息子の伍郎からこの話を聞くと、非憤やるかたない面持で叫んだ。

「馬鹿どもめ。今の若いもんは何が判るだ。民主的でねえと？ 何をぬかす。口ばかり一人前で働きは半人前だ。いいか、この文句は村長が感心して、県下に誇る最高の芸術的音頭だと折紙をつけたんだぞ。芸術つてものは、大したもんだ。芸術なんてものは、お前、もう誰にも出来ることじやねえ。いいか、芸術だぞ。昔の人は、みんな芸術が判つたんだから……ああ、長生きはしたくねえ……」

彼はそのまま立上つた。どつとこみ上げてくる情感が、彼の心をせつないほど締めつけ、それが又、一杯飲まなきや納まらねえな、という判断に移行した。

「出かけるぞ。今夜は区長の協議会があるからな……」

女房のサキにそう言うと、相手に返事をする余裕を与えない素早さで、手荒く表戸を開けていた。

牛伏村全体が濃い夕闇の中にしずんでいる。三月の上旬だというのに、はだを刺すような冷たい風だ。最近、村で一軒だけの飲み屋「千鳥」が開店した。丘を越えた隣り部落の入り口にある。

池内市助は、手拭で頬をつつむと、雑木林の中にうねり続く道を歩き出していた。両側をうずめる



すすきの穂が、さわさわと風にゆれている。彼は見えない空間に向つて、力一つばい牛伏音頭を歌い始めたのである。

丁度その頃。

村に駐在する土田巡査が、二里の峠道を越して、ようやく、牛伏村の入り口に差しかけた所であつた。

彼はこの村に移つてまだ三日目であつた。前任者が脳出血で急逝したのである。

町の署から転勤を命ぜられ、始めて駐在巡査として赴任して来た日、家財道具をのせたトラックの上から、心細げに周囲の山々を見つめている妻の横顔に気づくと、彼はつとめて明るい声で呼びかけた。

「なーに、住めば都だよ。それに、のんびりと落つて、山の中つてものも、又いい所があるものさし」

だが、不幸にして彼の予言は適中しなかつた。つまり、この村には歯科医というものが無い。四十才の土田巡査は、入れ歯の完成までに一週間という所で転勤となつた。彼は着任早々、町の歯科医まで二里の峠道を越さなければならぬ運命に、まだその時は思い当らなかつたのである。